労働力商品と労働過程*

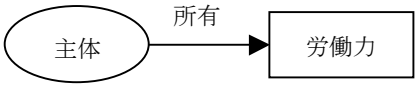
沖　公祐†

2007,6,15

１．労働力・身体・主体

> 商品交換は、それ自体としては、それ自身の性質から生ずるもののほかにはどんな従属関係も含んではいない。この前提のもとで労働力が商品として市場に現われることができるのは、ただ、それ自身の所持者が、それを自分の労働力としてもっている人が、それを商品として売りに出すかまたは売るかぎりでのことであり、またそうするからである。労働力の所持者が労働力を商品として売るためには、彼は、労働力を自由に処分することができねばならず、したがって彼の労働能力、彼の人格の自由な所有者でなければならない。(182)

ここでは、(自由な) 労働者の主体性が二つの側面から語られている。第一に、労働者は他人の所有物（奴隷）＝客体ではない。第二に、労働者は、労働力を所有する主体である[1]。



労働者は労働力という所有物の所有者である。労働力とは、マルクスによれば、「人間の肉体すなわち生きている人格のうちに存在していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するときにそのつど運動させるところの、肉体的および精神的諸能力の総体」(181) のことである。

ところで、労働力、すなわち、身体のうちに存在する諸能力の所有は、身体の所有と同じだと言ってよいであろうか。一応言えそうではある。身体と身体的能力の関係は、商品体と有用性の関係と類型性がある。「有用性は、商品体の諸属性に制約されているので、商品体なしには存在しない」(50)。有用性の所有は商品体の所有と切り離せない。より正確に言えば、所有されるのは商品体であって、有用性は商品体の属性であるにすぎない。同様に、主体は、労働力ではなく、身体を所有している。この類推が正しいとすれば、上

---

* 東京大学大学院小幡ゼミ報告。

† 香川大学経済学部 kosuke@ec.kagawa-u.ac.jp

[1] 「所持（占有）Besitz」と「所有 Eigentum」は違うという主張（青木孝平）もあるが今は考えない。

の引用は、結局のところ、ロックの「自分自身の身体に対する所有権」に帰着する。

ロックにとって、「自分自身の身体に対する所有権」は、労働の成果の帰属を根拠づける。しかし、身体に対する所有がたんなる比喩でないとすれば、身体に対する所有権は、その使用＝労働だけでなく譲渡も可能にするものでなければならない。しかし、ロックは、自分の生命を支配する権力（生殺権）を譲渡することが原理的に不可能であるという理由から身体の譲渡は不可能であると言う。

ロックの理由付けの妥当性は措くとして、身体の譲渡という問題についてもう少し考えてみる。身体の譲渡あるいは売買は必ずしも不可能というわけではない。少なくとも、市場原理と抵触しないような身体の売買はありうる。自分の所有する他人の身体（奴隷）を販売するという場合がそれである。問題は、「自分自身の身体に対する所有権」をもつ自由人が自分の身体を譲渡すること（自己奴隷化）が可能かであるが、ロックはこれをはっきりと否定した[2]。マルクスもこれに対しては否定的なようだ。「もし彼〔労働力の所持者〕が労働力をひとまとめにして一度に売ってしまうならば、彼は自分自身を売ることになり、彼は自由人から奴隷に、商品所持者から商品になってしまう」（182）。労働力の所持者が身体を所有する主体であり、身体が主体の所有物であるなら、身体を譲渡しても主体性は残るはずだが、そうはならない。自分の身体を売るとき、商品所持者から商品になるとマルクスは言うが、そうだとすれば、商品を所有する主体は消滅することになる。このことは、商品所持者は「互いに相手を私的所有者として認めあわなければならない」（99）という市場原理に抵触する。ロック流の〈主体－身体〉という所有図式は、市場原理にはうまく馴染まないようである[3]。

この問題を時間の導入によって回避することができるという考えもある。過去の主体が現在の身体を売ったと見なせば、自己奴隷化は不可能ではない[4]。いわゆる「債務奴隷制 Peonage」（182）もこのようなものとして解釈できるかもしれない。

労働力の売買についてはどうか。労働力の所有が身体の所有に他ならなかったように、労働力の売買も身体の売買に行き着くのだろうか。確かに労働力は宙に浮いているものではなく、身体から離れて労働力はありえない。それにもかかわらず、労働力の売買は身体の売買とは違うとマルクスは言う。身体（奴隷）の売買では、「労働力をひとまとめにして一度に売ってしまう」が、労働力の売買では、「一定の時間を限ってのみ労働力を売る」（182）にすぎない。

奴隷のように身体のすべてを売るならば兎も角、身体の一部を売っても、所有者の主体性は損なわれないとマルクスは考えているようである。これが正しいとすれば、労働力の売買は確かに市場に適合的である。労働力の売買において、労働者は身体のすべてを譲渡

---

[2] ロックの場合、すべての人間は生まれながらに「自分自身の身体に対する所有権」をもつ（つまり生まれながらの奴隷はいない）のだから、結局は、奴隷の売買そのものが不可能だということになる。
[3] 反対に、ロックの所有論は、資本－賃労働関係前提にしているという見解（C.B.Macpherson）もある。
[4] 森村進。

するわけではないので、労働力を譲渡したとしても労働者の主体性は残されるからである。

問題は、身体の一部ということの意味である。マルクスの述べていることを字義通りに受け取れば、「一定の時間を限ってのみ」売るということが身体の一部ということを意味していると考えられる。これは、先の自己奴隷化（債務奴隷）の正当化のロジックを拡張したものと言えよう。

自己奴隷化の場合には、自分の身体（の全体）を売り渡してしまう前は、「自分自身の身体に対する所有権」を備えた主体であるが、譲渡した後は主体性を喪失すると考えられた。労働力の売買の場合、時間決めで売るのだから、その時間の前後においては労働者は主体性を有していると言えそうである。では、売り渡した当の時間内においてはどうか。その時間内に限って言えば身体の所有権のすべてを明け渡していると見るべきだろうか。かりにそうだとすると、労働者は、最初、主体性を有し、次いで、主体性をいったん喪失し、その後、主体性を回復するという道筋を辿ることになるが、これはやや無理がある。むしろ、労働力の売買において、労働者は身体の一部を売るということには、労働者が身体を時間決めで売っているということだけではなく、時間内においても身体のすべてを売っているわけではないということも含まれると考えるべきではなかろうか。

決められた時間内においても労働者は身体のすべてを譲渡しているわけではないということは、労働者は白紙委任状を渡しているのではないと解される場合がある[5]。すなわち、労働者は、一定期間内においてさえも労働力の無限定な使用を許すわけではなく、労働時間、労働強度、労働内容などを限定して売り渡すのだという理解である。しかし、ここではよりきつく取った上で、無限定の労働力を売ったと考えても主体性は失われないと考えたいと思う。

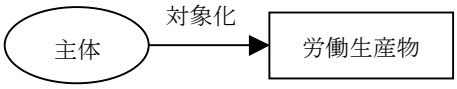
無限定の労働力を売ったとして、その後に何が残るのか。労働をする能力以外の能力が残るのだと言いたくなるが、労働力が身体の諸属性の総体である以上、それ以外の非労働能力なるものを仮構するのは無理である。そうではなく、労働力の売買が、労働力に還元されない身体の過剰 etwas mehr として主体を設定すると考えてみてはどうか。主体が身体を所有するという図式がまずあって、その上で、身体の全部または一部を譲渡するわけではない。労働力の売買が身体を主体と労働力に二重化するのである。マルクスが、労働者は、身体を所有する主体ではなく、労働力を所有する主体だと言ったことに意味があるとすれば、この点にあるように思われる。

２．労働過程――情動・構想・実行

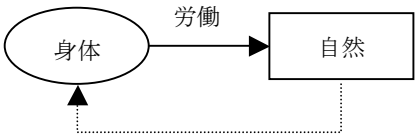
マルクスには労働論には「対象化 Vergegenständlichung」という概念がある。もともと「対

[5] 田中章喜。

象化」は労働を表わすヘーゲルの概念であった。ヘーゲルは、労働が自己意識（主体）の「対象化」または「外化 Entäußerung」であると考えた。



マルクスも若い頃はこのヘーゲルの「対象化」概念に従っていたが、『資本論』では、生きた労働と対象化された労働を対置し、流動状態の労働が生産物のなかに凝固することを対象化と呼ぶようになった。ヘーゲルの（そして初期マルクスの）「対象化」概念には主体が伴っていたが、『資本論』ではこの構えそのものを放棄するに至っている。代わりに現われてきたのが、労働を人間と自然の物質代謝（の一環）と捉える視角である。



労働は必ず身体を介して行われるが、身体は労働しかできないわけではない。労働しないこともできるし、労働しながら他のことをすること（マルチタスク）もできる。また、労働の一部を外部化することもできる。

もっとも、活動のどこまでが労働で、どこからが労働でないかを線引きするのは難しい[6]。生産物の立場から見ることで、労働でない活動を弁別することはできるかもしれないが、生産物に結実する活動も、対象に直接働きかける〈実行〉はよいとしても、目的を設定する〈構想〉、さらには構想を突き動かす〈情動 emotion〉となってくると労働に含めるかどうかについて意見が分かれるだろう。ここでは、〈情動〉→〈構想〉→〈実行〉の流れの全体を労働と呼んでみる。労働の外部化（アウトソーシング）はこの流れの川上と川下の両方で生じうる。

〈情動〉の外部化とは、自分の〈情動〉ではなく、他人の〈情動〉に動かされた労働、すなわち、他人のための労働である。〈構想〉もまた外部化されうる、すなわち、他人の〈構想〉に基づいて労働することができる。しかし、〈構想〉を完全に外化することはできない。他人の〈構想〉に基づいて行動する場合にも、他人の〈構想〉を受け止め、それを〈実行〉に移すための〈構想〉が必要である。〈構想〉と〈実行〉は分離されうるのではなく、〈構想〉は二重化されうるという方が正確である。

〈構想Ⅰ〉→〈構想Ⅱ〉→〈実行〉

[6] あらゆる身体活動は（遊びも含めて）労働であるという見解もありうる。初期マルクス。

〈実行〉の外部化はこれを逆から眺めたものである。自分の〈構想〉を他人に〈実行〉させる。〈実行〉の完全な外部化、すなわち、〈実行〉なき〈構想〉がありうるかは意見が分かれるだろう。資本家は労働をするのか、といった古典的な問題もこの点にかかわる。

労働の外部化は、労働力商品化とは無関係に起こりうる。また、労働力商品化のもとでも、労働の外部化は多様でありうる。とは言え、賃労働が他人のための労働であるという点からすれば、〈情動〉の外部化という事態は動かし難いように見える。労働者は、他人の〈情動〉に従って労働しており、したがって、自分の〈情動〉は労働や労働の成果には向かっていないのではないか。

このように見れば、労働力の売買は、〈情動〉の領域には及ばないことが前提とされることになる。逆に言えば、労働力が譲渡されたとしても、〈情動〉の領域は労働者に残される。さらに、〈情動〉が〈主体〉と、〈構想〉と〈実行〉が〈労働力〉と重ね合わせられれば、二元論が新たな装いで再建される。

〈情動〉→〈構想〉→〈実行〉
〈主体〉→〈　労　働　力　〉

しかしながら、労働力商品化において〈情動〉が外部化されるという前提は妥当なものだろうか。ここで、注目すべきなのは、労働が物質代謝というループの一環として位置づけられるという点である。自然に働きかけて得られた労働の成果は、生活手段の消費による身体の維持というかたちでフィード・バックするのは確かだが、〈情動〉に作用する側面も看過されるべきではない。すなわち、労働を突き動かす〈情動〉は、自然発生的に出てくるのではなく、〈情動〉もまた労働を通じて形成されるという循環構造をなしているのである。

〈情動〉が完全に外部化されるということは、このようなループが遮断されることを意味する。しかし、〈構想〉の場合と同様に〈情動〉を完全に外部化することはできないと考えるべきであろう。労働は、労働者の〈情動〉を欠いては成り立ちえない。

とはいえ、労働者が労働の成果から切り離されている限り、〈情動〉が外部化される傾向が生じることは避けられない。したがって、労働者の〈情動〉を内部に繋ぎ止めておくための何らか機構が必要になってくる。差し当たりここでは、成果主義と労働の「遊び Spiel」（193）として「享楽」を挙げておこう。

また、近年、〈情動〉そのものの操作が労働であるような〈情動〉労働が顕著になってきたことが新たな問題を提起していることも指摘しておく。